

『歎異抄』と覚如教学

龍谷大学
林 智 康

一 『歎異抄』の著者について

『歎異抄』の著者はいままでに三説見られる。⁽¹⁾

(一) 覚如説——親鸞の末娘覚信尼の孫で、本願寺の基を築いた第三代宗主。

(二) 如信説——親鸞の息男善鸞の子である本願寺第二代宗主。

(三) 唯円説——親鸞の直弟子の河和田の唯円。

(一) 覚如説

- ・ 一雄撰『真宗正依典籍集』一六二四(寛永元)年
- ・ 知空撰『真宗録外聖教目録』一七一八(享保三)年
- ・ 月筌撰『聖教目録』一七二九(享保一四)年
- ・ 『真宗法要』一七六五(明和二)年

・『真宗仮名聖教』 一八一(文化八)年

(二) 如信説

- ・ 惠空撰『仮名聖教目録』 一七二(享保六)年
- ・ 性海撰『聖教目録』 一七二七(享保一二)年
- ・ 寿国著『歎異抄可笑記』 一七四〇(元文五)年
- ・ 先啓撰『浄土真宗聖教目録』 一七四一(寛保元)年
- ・ 僧鎔撰『真宗法彙目録及左券』 一七五〇(寛延三)年
- ・ 慧琳撰『和語聖教目録』 一七六七(明和四)年
- ・ 深励著『歎異抄講林記』 一八一七(文化一四)年

(三) 唯円説

- ・ 玄智著『浄土真宗教典志』 一七七八(安永七)年
- ・ 同 『大谷本願寺通記』 一七八七(天明七)年
- ・ 履善著『校補真宗法要典拠』「拾遺」 一八一(文化八)年
- ・ 超然著『校補真宗法要典拠』「校補」 一八五五(安政二)年
- ・ 了祥著『歎異抄聞記』 一八四二(天保一三)年

覚如説は江戸時代本願寺教団では多くの人が支持していたが、江戸後期に深励が僧鎔や慧琳の説を承けて『歎異

抄講林記』を著し、「三文一理」を述べて如信説をとった。「三文」とは三つの文証で、『歎異抄』と覚如の『口伝鈔』に共通する三文を挙げ、『歎異抄』は親鸞より如信へ、『口伝鈔』はさらに如信より覚如へ伝えられたもので、『歎異抄』は如信の著であると見なした。また「一理」は一つの道理で、覚如は親鸞が亡くなって八年後の誕生であり、「親鸞から聞いた物語の中で耳の底に留まって忘れることのできない言葉を記す」という「序文」の内容と矛盾しているので、親鸞より面接口訳した如信の著と定めた。

しかし続いて深励の弟子である了祥は『歎異抄聞記』において、『歎異抄』は親鸞の弟子唯円の直聞直記であり、深励の如信説に反し、唯円説を唱えた。唯円説はすでに履善や玄智によって主張されていたが、了祥は嚴密な論証でもって学問的研究を進めたために、唯円説が定説化した。

親鸞の門弟を記した『親鸞聖人門侶交名牒』(きょうみやうめいどう)には「唯円」の名が四名見られる。(1)直弟子の常陸河和田の唯円、(2)直弟子の下野高田住真仏の弟子で、常陸国府住信願の弟子、すなわち曾孫弟子の鳥喰の唯円、(3)直弟子の下野上野住尼法仏の弟子(孫弟子)の唯円、(4)真仏の弟子で、武蔵荒木住光信の弟子願明のさらに弟子(玄孫弟子)の唯円、である。今日『歎異抄』の著者である唯円は、①河和田の唯円説、②鳥喰の唯円説、③河和田の唯円と鳥喰の唯円同一人物説等があるが、直弟子河和田の唯円が有力視されている。

二 如信、唯円と覚如の出会い

覚如の次男の従覚著『募婦絵詞』第三卷第三段——三五一(観応二)年に、

弘安十年春秋十八といふ十一月なかの九日の夜、東山の如信上人と申し賢哲にあひて釈迦・弥陀の教行を面受し、他力撰生の信証を口伝す。所謂血脈は叡山黒谷源空聖人、本願寺親鸞聖人二代の嫡資なり、(中略)

将又、安心をとり待るうへにも、なを自他解了の程を決せんがために、正応元年冬のころ、常陸国河和田唯円房と号せし法侶上洛しけるとき、対面して日來不審の法文をいいて善悪二業を決し、今度あまたの問題をあげて、自他数遍の談によびけり。かの唯円大徳は親鸞聖人の面授なり。鴻才弁説の名譽ありしかば、これに対してもますます当流の氣味を添けるとぞ。

〔真宗聖教全書〕第三卷七八〇頁・『真宗史料集成』第一卷九三〇〜九三二頁と述べている。一二八七（弘安一〇）年十一月十九日に東山大谷において、覚如（一八歳）は如信（五三歳）より真宗の教を口伝によつて受ける。すなわち黒谷法然聖人——本願寺親鸞聖人——大綱如信上人の三代伝持の血脈を示される。続いて、一二八八（正応元）年の冬、安心をうる上にもすべての人に正しい教を了解させようと上洛してきた唯円（六七歳？）に覚如（一九歳）は対面して、日頃持っていた疑問である善悪二業の問題を解決し、その他種々の問題を話し合つた。そして覚如は唯円を親鸞の面授の弟子であり、学問にも弁説にもすぐれたりつばな人物であると讃え、この対面によつて覚如はますます真宗の教えに対する学びを深めていったと思われる。本文に述べる「日來不審の法文」とは「法」の「文」、つまり「浄土真宗の教え」について書かれた「書簡」（手紙）と解釈すれば、これが『歎異抄』と考えられるかもしれない。後に蓮如が書写された本の表紙には「歎異抄一通」と記されている。

三 唯円と唯善の関係

次に覚如の弟子乗専著『最須敬重絵詞』第五卷第一八段——一三五二（文和元）年に、大納言阿闍梨弘雅といふ人あり。俗性は小野宮少将入道具親朝臣の子息に、始は少将阿闍梨（失名）と申ける

人の世を遁て禅念房となん号せし人の真弟なり。(中略)後にはこれも隠遁して河和田の唯円大徳をもて師範とし、聖人の門葉と成て、唯善房とぞ号せられける。とりわき一宗を習学の事などはなかりしかども、真俗に亘てつたなからず、万事につけて才覚をたてられける人なり。覚恵尊宿そんしゅうには一腹の舍弟おほにて坐し給ければ、大和尚位覚如には叔姪しゅじやくの中にて、居を南北に並べ、交まじりを朝夕にむすばれけるが、常には法門の談話ありけり。
〔真宗聖教全書〕第三卷八四三〜八四四頁・『真宗史料集成』第一卷九四六頁と述べる。弘雅は小野宮具親の子息、始めは禅念房と号した人の子供であった。後に唯円を師とし唯善房と号した。そして覚恵とは同じ母親の覚信尼であるから兄弟(覚恵―兄、唯善―弟)の關係になる。覚信尼は最初の夫である日野広綱との間に覚恵を産み、再婚した小野宮禅念との間に唯善(弘雅)を産んだのである。覚如にとつて唯善は叔父になる。

次に越中願楽寺の宗誓著『遺徳法輪集』第三卷一七一〇(宝永七)年に、

同郡河和田村報仏寺東派

当寺開基唯円房は俗名平次郎とて平太郎舎弟なり、聖人の御弟子となり如信上人の御代まで給仕せり、昔より寺号を泉慶寺と号し(中略)これによりて願入寺主より本寺へ申したまひ翌年寺号を報仏寺と免許したまへり、(平次郎弟に平五郎といへるあり聖人の御門徒となりき その末孫いま大和にありと云云)

〔真宗全書〕第六五卷一三三―一三四頁・『真宗史料集成』第八卷六一―四頁と述べる。ここでは唯円は報仏寺(旧泉慶寺)の開基で俗名は平次郎といい平太郎の弟であり、親鸞の弟子となり大綱の如信の代まで仕えていたと述べている。また平五郎という弟がいてこれも聖人の門徒となり、末孫が大和奈良にいと書き添えている。

また美濃安福寺の先啓者『大谷遺跡録』第三卷一七七一(明和八)年に、

法喜山報仏寺記東派　ししど大田町より河和田へ三里

常陸国茨城郡河和田法喜山報仏寺は、高祖御弟子河和田唯円法師の遺蹟也。唯円房、俗性は小野宮少将入道具親朝臣の子息に、始は少将阿闍梨(失名)と申ける人の世を連れて禅念房となん号せし人の真弟(唯善別腹舍呂)なりと云云。高祖帰洛の後、仁和元年十九歳にして、高祖(千時とよとき六十八歳)の御弟子となり、真宗の奥義に達せり。大部平太郎の達請により、師命も亦重ければ、常陸国に下り、河和田に弘興の基趾をひらいて、これを泉慶寺と云。盛に専修念仏の法を弘通す。文永十一年五十三歳にて上洛し、阿州安福郡(安福郡安福村)に高祖門弟真岡慶西居住せり)に至り慶西に謁す。慶西云、和州の群品聞法の志深く、請ずること厚し、然るに、我老朽にして其請に応ぜず、足下慈愍を以てかの国を化せよと。唯円竟に和州に移り、吉野郡下市秋野川の辺に一字を営構して教導す。後関東に下り、又正応元年上都し、覚上人に謁し奉り、同二年二月六日六十八歳にして下市に化す。今の下市立興寺は彼師弘法の古跡也。〔真宗全書〕第六五卷三九〇頁・〔真宗史料集成〕第八卷七一〇頁〕

と述べる。光啓の『大谷遺跡録』は前述の乗専の『最須敬重絵詞』および宗誓の『遺徳法輪集』の内容を承けてさらに詳しく述べられている。前の『最須敬重絵詞』では、唯善(弘雅)が小野宮具親の子息で禅念房の真弟であるとし、後の『大谷遺跡録』では、唯円が小野宮具親の子息で禅念房の真弟としている。そして『最須敬重絵詞』は、唯善は覚恵と一腹の舍弟すなわち異父同母の兄弟と述べる。また『大谷遺跡録』では、唯円は唯善と別腹舍兄、すなわち同父異母の兄弟と述べている。同じような文なので、『大谷遺跡録』の「唯円房」は「唯善房」の誤記かと思われるかもしれないが、後に(唯善別腹舍兄)となっているので、やはりここは報仏寺の開基である唯円についての文と見られる。後事に述べる文は明らかに唯円について言及している。唯円は親鸞が帰洛後の一二四〇(仁治元)年に門弟になっており(親鸞六十八歳、唯円十九歳)、大部の平太郎の要請と親鸞の師命によって、常陸の河和田に泉慶寺(後に報仏寺)を開いて念仏を弘通した、そして一二七四(文永一一)年五十三歳で上洛して親鸞の

門弟慶西の要請により吉野下市に一字を建立し教化に励んだ。後に関東へ下り、また一二八八（正応元）年六十七歳で再び上洛して覚如と面談し、さらに翌一二八九（正応二）年二月六日に六十八歳で亡くなっている。後の下市立興寺がその古跡となつて⁽³⁾いる。

光啓は『大谷遺跡録』の付録として刊行した『諸寺異説彈妄』において左記の如く述べている。

常州報仏寺

同国河和田報仏寺『宝永記』云、唯円房は俗名平次郎とて平太郎弟也。又平次郎弟に平五郎といへるあり。聖人の御門徒となりき。其末孫今大和にありと。近來は北条平太郎、弟平二郎、十九歳にして御弟子となり、河和田に居住せり。聖人御帰洛の後、唯円五十三にて上洛し、聖人へ給仕し、御遷化の後、建治年中和州下市に下り、草菴をしめ、老後に河和田に下り、正応元年上都して覚如上人に謁し奉り、翌年二月六日六十八歳下市にて往生せりと。これ和州立興寺及び報仏寺の説也。この説、ただ信用しがたし。其故は、六十八歳正応二年の寂なれば、十九歳の時は、高祖帰洛の後六十八。仁治元年、門弟に列る。五十三にて上洛し、聖人へ御給仕と云へり。唯円五十三は、文永二年なれば、高祖御遷化十三年の後也。何ぞ御給仕申んや、五十三にて上洛し、その翌建治元年和州に下るとみえたり。私考に大納言弘雅阿闍梨、唯円を慕ふて河和田に下り、弟子となり、唯善房と名く。尤も智徳なる唯善なれども、『一期記』等の意、我慢強氣の人なれば、中々唯円の徳を慕ふ許にはあるまじと思慮すること多年、然るにかの存覚の『一期記』に小野宮禅念坊を唯円父とあり。ことに高祖御帰洛後、六十八歳の時、御弟子となれり。唯善の師範とたのみ玉へば、道理としても禅念坊の息男なるべし。況や唯円父とあるをや。決定必定、禅念房息にして、唯善らは別腹の兄弟也、中古の邪推不当の至なるべし。平太郎、河和田に請して化導せしむ。是故に後代平太郎に親き人也。弟なるべしを誤り伝ふとみゆ。正説『遺跡録』に載す。

〔真宗全書〕第六五卷四四四—四四五頁

ここでは立興寺や報仏寺の説を批判している。唯円五十三歳の時は明らかに師親鸞遷化十三年後になっているので給仕はできない。五十三歳は上洛し直弟慶西の要請により和州吉野下市に向かったと思われる。また『存覚一期記』に小野宮禪念が唯円の父であると述べることを支持している。唯円と唯善との間には四十四歳ほどの年令差があるが、異母兄弟と見ることもできると思われる。

また光啓著『大谷遺跡録』第二巻には大谷派と本願寺派の二か寺の常敬寺が記されている。

中戸山常敬寺東派

越後国頸城郡高田中戸山西光院常敬寺は、高祖聖人の御息女覚信尼公の御息男（御父は小野宮禪念と号す）唯善御房草創するところなり。（中略）それより後蓮如上人の御代に至り、今の常敬寺第六世善鷲の時、御首を御本廟に帰し奉り回心懺悔す。蓮上人仰られて云、今以後本山に随従して、常に敬ふべしと。之に依りて常敬の二字を以号す。第十世了照の時、天正年中に秀吉公と北条家と軍の時、中戸山は兵火の為に回祿す、これよりして当所に移住すと云云。（『真宗全書』第六五卷三六四頁―三六五頁・『真宗史料集成』第八卷六八九頁）

中戸山常敬寺西派　かまだより新檜へ半里。市川へ一里半、流山へ三里、山さきへ二里半、中戸へ四里半、中戸より木売西光院へ五里

総下洲葛飾郡下河辺床閑宿辺野方深栖郷中戸村常敬寺は関東七箇寺随一、高祖聖人の御孫、唯善御房の遺跡也、唯善房は延慶三年に草創して中戸山西光院と云、第四世善栄の時、いよいよ法我を逞ふして浄土真宗の本山たるんことを欲して、上洛し高祖の真影の御首を盗み総州に下りしかども、三代の後善鷲先非を悔て、御首をかへし奉と也。第十世了照の時越後へ移す。今阿寺となれり云云。

（『真宗全書』第六五卷三七九頁・『真宗史料集成』第八卷七〇一頁）

覚信尼公と小野宮禪念の息男である唯善が開基である常敬寺は、第四世善栄の時に上洛して高祖の御首を盗んだが、第六世善鷲の時に御首を御本廟に帰し回心懺悔した。蓮如上人はこれからは御本山に随従して常に敬ふべしと述べたので常敬の二字を寺号とした。そして第十世了照の時に、秀吉と北条氏との交戦により常敬寺は焼かれてしまい、越後へ移住した。その後東西両派の二ヶ寺になったのである。

四 唯円は源輔通か、あるいは輔時か

次に唯円について諸史料を通して考察してみたい。左記に關連史料を見てみよう。⁽⁴⁾

(一)『村上源氏系図』——『尊卑分脈』第三篇 (『新訂増補国史大系』第六〇卷上四七九—四八八頁)

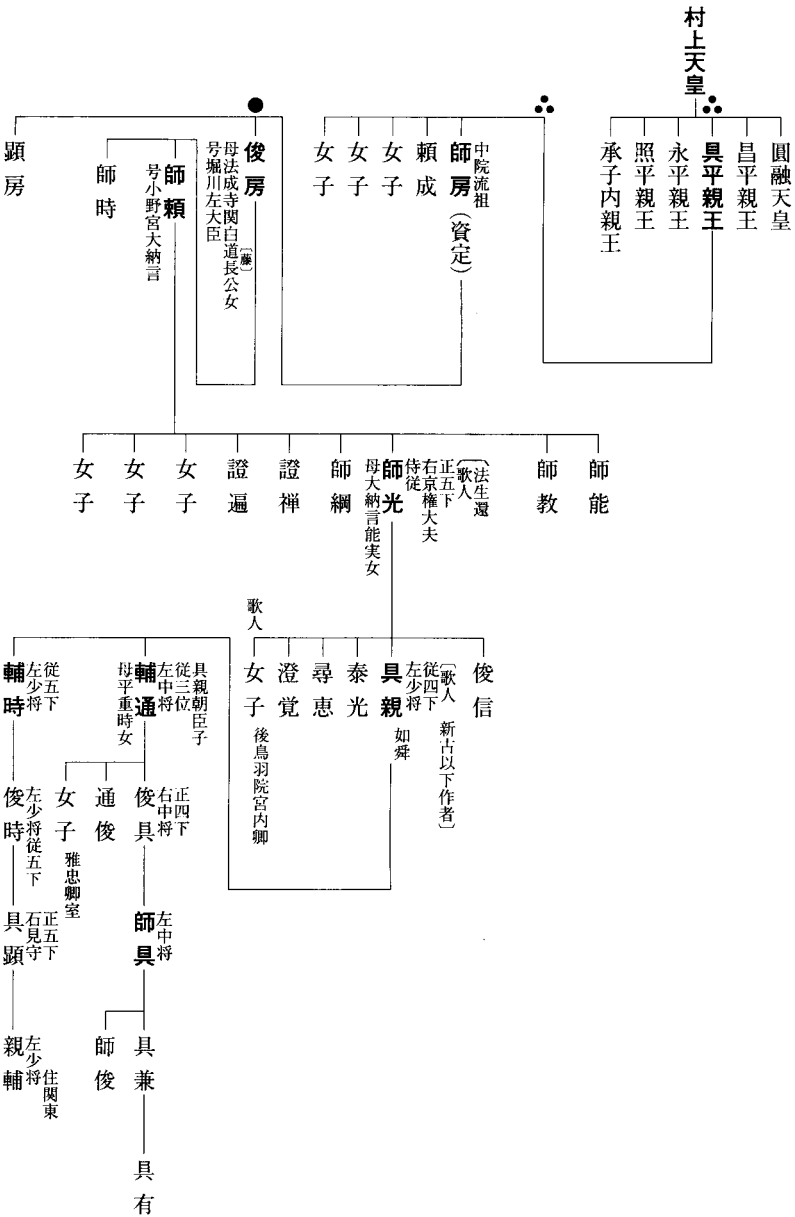
(二)『日野一流系図』にある『中戸山常敬寺系図』——一五四一(天文一〇)年

(『真宗史料集成』第七卷五四四頁)

(三)乘海書写・知空本『中戸山常敬寺系図』——一七三〇(享保一五)年 (『真宗史料集成』第七卷六九七頁)

(一)『尊卑分脈』に『村上源氏系図』が載っている。村上天皇の子である具平親王の第二子資定が関白藤原頼通の猶子となり、源姓を賜り、源師房となった。この師房を祖とするのが村上源氏の流れである。そして俊房から「小野宮大納言」と号した師頼となる。小野家は三男の師光から具親へ継承される。具親については、『平安時代史事典』第三卷二四三四頁によると、鎌倉期の歌人で師光の二男、妹に歌人の宮内卿がいる。九条兼実の子良輔の養子となる。後鳥羽上皇の歌合にも出ており、弘長二年の三十六人大歌合にも「沙弥如舜」の名が見られ、八十余歳の生涯が確認されている。親鸞は弘長二年には九十歳で遷化されているので具親と十歳の差がある。そして具親の子に輔通と輔時があるのである。

〔村上源氏系図〕（尊卑分脈）



〔歎異抄〕と覚如教学

五 『歎異抄』と覚如の著述

(一) 『歎異抄』の組織は左記の如くである

師訓篇

序(漢文)

親鸞の語録(第一章―第一〇章)

異義篇

序

唯円の異義を歎く言葉(第二章―第八章)

後述(後記)

(二) 覚如の主な著述

(1) 『親鸞伝絵』 西本願寺本―一四段(二六歳)、専修寺本―二三段(二六歳)、康永本―一五段(七四歳)、照願寺本―一五段(七五歳)、弘願本―一五段(七七歳)

(2) 『執持鈔』 五条(五七歳)

(3) 『口伝鈔』 二一条(六二歳)

(4) 『改邪鈔』 二〇条(六八歳)

右の覚如著述に引用されている『歎異抄』の文を対応すると次の如くである。⁽⁵⁾

①『親鸞伝絵』上巻第七段 ②『執持鈔』第二条 第三条

『歎異抄』後述 『歎異抄』第二章 第一章

③『口伝鈔』第四条前半 第四条後半 第五条 第六条 第七条 第一六条 第一七条 第一九条

『歎異抄』第一章 第一三章 第八章 第六章 後述 第一四章 第九章 第三章

④『改邪鈔』第四条 第八条前半 第八条後半

『歎異抄』第六章 第二二章 第六条

①『親鸞伝絵』上巻第七段—信心—異の論争、法然・親鸞両聖人の関係

②『執持鈔』第二条—往生浄土は信心が根本、法然・親鸞両聖人の関係

『同』第三条—往生は阿弥陀仏の大願業力による。善業も要にあらざ、悪業もさまたげにならざ

③ 『口伝鈔』 第四条前半―善悪二業の事、阿弥陀仏の大願業力

『同』 第四条後半―千人殺害と往生

『同』 第五条―念仏は行者の善にあらず行にあらず

『同』 第六条―親鸞は弟子一人もたず、信楽房と本尊・聖教

『同』 第七条―凡夫往生の事、五劫の思惟、ただ親鸞一人がためなり

『同』 第一六条―信の上の称名の事、高田の覚信房、「正信偈」（龍樹讚）の四文、信心正因、信心の利益
（現生正定聚・平生業成）、称名報恩

『同』 第一七条―凡夫として毎事勇猛のふるまひ、みな虚仮たる事、往生の一大事は如来にまかせる

『同』 第一九条―如来の本願はもと凡夫のためにして、聖人のためにあらざる事、悪人正機・善人傍機

④ 『改邪鈔』 第四条―念仏する人は人中の妙好人なり、それがしまつたく弟子一人もたず、みなとも同行なり

『同』 第八条前半―わが同行ひとの同行といつて相論する事、諍論のところはもろもろの煩惱おこる、智者

これを遠離する

『同』 第八条後半―あひともなへといふとも、縁尽きぬれば疎遠となる。親しまじとすれども、縁尽きざる
ほどはあひともなふにたれり

六 覚如著述の内容

覚如は一二九四（永仁二）年の親鸞三十三回忌の時に、法然の『知恩講私記』にならつて、『報恩講私記』を著した。

『報恩講式』ともいわれる。惣礼・三礼・如来唄・表白・回向よりなり、表白は(一)真宗興行の徳を讃ず、(二)本願相應の徳を讃ず、(三)滅後利益の徳を述す、この三段に分けられる。真宗教団で最も重要な報恩講はこれから始まるのである。

次に翌一二九五(永仁三)年に『親鸞伝絵』を著される。親鸞の遺徳を讃えるために、その生涯を上下数段に記された詞書と、各段に相應する図絵が描かれたが、後に詞書と図絵が分かれ、詞書を『御伝鈔』、図絵を『御絵伝』と呼ぶようになった。最初に作られたのが覚如二十六歳の時であったが、晩年に至るまで増補改訂された。現在は上下二巻、計十五段から成っている。上巻——(一)出家学道、(二)吉水入室、(三)六角夢想、(四)蓮位夢想、(五)選択付属、(六)信行兩座、(七)信心諍論、(八)入西鑑察。下巻——(一)師資遷諦、(二)稲田興法、(三)弁内濟度、(四)箱根靈告、(五)熊野靈告、(六)洛陽遷化、(七)廟堂創立 である。

次に『執持鈔』は一二三二六(嘉暦元)年、覚如五十七歳の時に著された。阿弥陀仏の名号を信受し、かたく執持する他力信心の要義を示された書である。五条の法語からなり、前四条は親鸞の法語による。また最後の一条は覚如自身の心を述べ、信一念往生や平生業成について示される。

次に『口伝鈔』は一二三三一(元徳三)年、六十二歳の時に著された。『口伝』は口づてに伝える意で、口授伝持、面授口決のことである。初めに「本願寺の鸞聖人、如信上人に對ししまして、をりをりの御物語の条条」と述べる。すなわち、親鸞—如信—覚如と他力真宗の繼承を二十一箇条に分けて示されている。本書においてはじめて法然—親鸞—如信の「三代伝持の血脉」を出され、法然の正しい教えが親鸞へ、それが如信そして覚如へ伝授されていると師資相承を明らかにされている。(一)法然門下で浄土異流の鎮西派の弁長、そして西山派の証空を批判し、親鸞が正しく法然を相承していることを示す。(二)親鸞の直弟子を中心とする門徒の教団に対して大谷本願寺教団の確立をめざしている。(三)真宗教義の中心である「信心正因・称名報恩」を述べている。

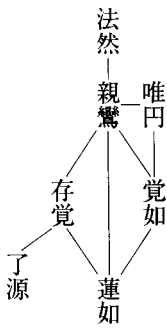
—続いて『改邪鈔』は一二三三七(建武四)年、六十八歳の時に著される。親鸞の門弟や信者の中に異義を主張する

者があらわれたために、破邪顕正（邪義を破し正義を顕す）のために述べられた。ここでも「三代伝持の血脈」を示し、邪義とするものを二十箇条にまとめ、大谷本願寺中心の真宗教団の確立をめざしている。(一)第二十条に大谷本願寺中心の教団作りが意図されている。(二)門徒行儀について、第三条まで通世のかたちを装い、裳も無衣むじゆや黒袈裟くろげさを用いる時衆の風儀を学ぶ者、第十四条でわざとなまった声で念仏する者、などに対して批判している。(三)第一条の名帳、第二条の絵系図、仏光寺教団で行われたことを異義とし、第八条の知識帰命（善知識のみ）を批判している。信心正因義を強調されている。

覚如の子息である存覚は直接『歎異抄』の文は引かれていない。覚如著述の『執持鈔』・『口伝鈔』・『改邪鈔』より前の一三二四（正中元）年、存覚は仏光寺了源のために『浄土真要鈔』を著している。（覚如五十五歳）したがってすでにこの書において「信心正因・称名報恩・平生業成」を示されている。覚如は存覚を二回義絶し二回とも赦している。また覚如の命によって仏光寺の了源を指導し、彼のために『浄土真要鈔』、『諸神本懐集』（覚如五十五歳）、『破邪顕正鈔』（覚如五十九歳）等を著しているのである。覚如と存覚の関係については別稿で述べたいと思う。

最後に、三代伝持の血脈（本願寺教団）

黒谷法然—大谷親鸞—大綱如信—覚如
真宗教学の歴史



註(1) 佐藤正英著『歎異抄論註』三〇頁参照。拙著『歎異抄講讀』二四八頁参照。

(2) 『真宗史料集成』第一卷 三河妙源寺本、常陸光明寺本、京都光園院本などがある。

(3) 佐藤正英著『前提書』五一―五二頁参照。報仏寺の本尊である阿弥陀仏像(一四八一〈文明一三〉年一月一三日造)の台座の墨書銘に、唯円は正応元年八月八日に寂したと記されているが、これは、『慕婦絵詞』の正応元年の冬に上洛して覚如に会っているので矛盾する。立興寺伝の正応二年二月二六日寂の説がよいと思われる。

(4) 尾野義宗著『歎異抄再発見への道』(一)七一頁、(二)六六頁、(三)八一頁にそれぞれ系図が示されているので、掲載させていたいただいた。

(5) 本論文発表後の初校の段階で、ほぼ同様な内容であるが、『歎異抄』を中心とする『歎異抄』の文と覚如の著述の文を比較した論文が刊行されたので、ここに掲載させていただく。

塚本一真著『歎異抄』研究における覚如の位置——『歎異抄』受容と唯円に対する姿勢——(矢田了章編『歎異抄』に問う—その思想と展開—二四八―二四九頁)